

抄 録

○内外頸動脈の局所解剖. Z. Jazuta, Zur topographischen Anatomie der Carotidenarterien. (Anatomischer Anzeiger, Bd. 59, Nr. 8.)

著者は成人並に新生児屍體各 100 例に於いて、内外頸動脈の相互的位置關係に就いて五種類を區別せり。即ち第一型は外頸動脈が内頸動脈の前方に離間して存在するものにして、成人に於いては之を 85%, 新生児に於いては 50% を見る。此場合外頸動脈は二腹筋後腹の下縁前方に至る。第二型は外頸動脈が内頸動脈の前方に直接するものにして、成人に於いては之を 10.5%, 新生児に於いては 50% を算す。此の場合外頸動脈は餘り前進せざる爲めに同筋下縁に至るを見ること少なし。第三型は外頸動脈が内頸動脈の外表に直接するものにして、成人に於いては之を 2%, 新生児に於いては 19% を算す。第四型は外頸動脈が内頸動脈の外表而も稍々後方に偏するものにして、成人に於いては之を 2%, 新生児に於いては 0.5% を算す。第五型は外頸動脈が内頸動脈の後方に離間して存在するものにして、成人及び新生児共に 0.5% を算す。而して第三、四、五型に於いては外頸動脈は胸鎖乳嘴筋の内方に隠在す。斯くの如く内外頸動脈の相互的位置關係に於いて、成人及び新生児に差違を生ずるは、脊椎頸部の彎曲並に喉頭の發育に關係するならんと思惟さるなり。

多くの學者によれば、總頸動脈の内外頸動脈の分岐點は甲狀軟骨上縁及び舌骨後端の間に存在す。併し乍ら著者は甲狀軟骨の中央に於いて分岐せるもの四例、環狀軟骨の下方に於て分岐せるもの一例(新生児)を見たり。

(解剖, 尾藤抄)

○「リポイド」の「クロロフィル」染色法. H. J. Arnat, Zum histologische-färberischen Lipoidnachweis mit Chlorophyll. (Zeitschrift f. w. Mikroskopie, Bd. 41, H. 4.)

Kleeberg は「クロロフィル」の酒精「アツェトン」溶液を使用せるが、著者の實驗によれば濃厚なる酒精は「リポイド」の溶解を惹起し易きを以て 80% 以下の酒精を使用せざる可らず、此際「アツェトン」の添加は染色を促進す。雖も敢へて之を必要とせず。

「クロロフィル」染色に於いて、吾人は「ズダン」染色に於けるより、鮮明に而も確實に「リポイド」を證明し得るなり。Kleeberg は此の際「コレステリンエステル」は綠色、中性脂肪は明綠色に染色すと云へるも、著者によれば之を信するを得ず。此の點に於いては「クロロフィル」染色は「ニールズルファート」染色に劣るを知る可し。

又分極顯微鏡検査に於いては、「ズダン」染色に優越し「ニールズルファート」染色は優劣を論ずる能はざるを知る。

Benda は變性脂肪と浸潤脂肪とは「クロロフィル」染色の程度を異にす可きなりと云へるも、著者は一般に之を確證し得ず、併し乍ら染色力が中性脂肪に對し不充分なる場合に於いては、腫瘍、傳染性肉芽に於いて「クロロフィル」は陽性に反應す。

尙ほ「クロロフィル」染色の優秀なるは、他の種々なる染色法と併用し得るのみならず操作の單簡及び迅速なる點にあり。(解剖, 尾藤抄)

○家兎に於ける求心性皮質聴路の起首に就きて. I. Yoshida, Über den Ursprung der Kortikopetalen Hörbahn beim Kaninchen. (Folia anatomica Japonica, Bd. II, H. 5—6.)

内膝状體より起首すさせらるる求心性皮質聴路は、是れが背腹二核の内何れより起るか未だ明らかならず。而も此の點を確定することは聴中樞に關する問題中重要なるものの一つたり。

著者は求心性皮質聴路に關する研究殊に顳顬葉の實驗的又は病的破壊後に於ける内膝状體の二次的變性に關する研究の梗概を記述し、其の際「ニッスル」染色を應用せるは Dantschakoff のみなることを注意せり。

著者は一家兎に於いて殆ど左顳顬葉皮質のみの破壊に成功し、他の家兎に於いては其の他に、後頭葉の一部分に副損傷を生ぜり。此の二家兎より前額斷連續切片を作製し、「ニッスル」染色を行ひ檢索するに、第一家兎に於いては内膝状體の背核内腹側部及び腹核は著明なる變性、又 Winkler, Potter の C 核の一部分の變性を見たり。第二家兎に於いては後頭葉の損傷のために生ぜし變性を除けば全く第一家兎と同一の結果を得たり。之によりて見るに求心性皮質聴路の起首は明らかに、主として内膝状體の腹核、一部分は背核の内腹側部なり。

尙ほ著者は内膝状體の常態に關する記載をなし、其の際背腹二核に於ける細胞の大きさ、形狀、排列等の差異を注意せり。(解剖、尾藤抄)

○摘出腎臓に於ける尿分泌の研究. E. H. Starling and E. B. Verney, The Secretion of urine as Studied on the Isolated Kidney. (Proceedings of the Royal Society Series B, Vol 97. No, B 684.)

著者等は犬の腎臓を摘出し心肺標品に「ポンプ」を連結せしめ 37°C に暖めたる脱纖維血を灌注して實驗を行ひ。

(A) 腎絲絨の官能. (B) 腎小管の官能. (C) 腎小管に於ける官能の局在. (D) 尿の低張性(Hypotonicity)の原因。

の四項を研究し次の結論を報告せり。

- 1) 血漿より絲絨の濾出さるる成分は非蛋白成分なり。
- 2) 「アチン」水素酸は腎小管の官能を停止する而して其場合には純粹に絲絨から濾出さるる成分が輸尿管から得られる。
- 3) 「チアン」水素酸の作用は可逆性のものであつて、「チアン」水素酸の灌注が長が過ぎなかつた場合には小管の細胞は正常の血液を灌注する時に其官能を恢復する。
- 4) Nrea, Sulphate 及び若し Phenol Sulphonephthalein が血清中にある場合には絲絨濾液中へ小管の細胞によつて分泌される。
- 5) 水、鹽化物、重炭酸鹽及び葡萄糖は絲絨濾出液の中から小管の細胞によつて逆吸收される。
- 6) 水は鹽化物よりも下部 (tube) に於て逆吸收が行はれると信すべき理由がある。
- 7) 摘出せる腎臓より得たる尿の低張性及鹽化物含量の少きさは血中炭酸減少症によるものではない。
- 8) 血漿又は血清内に於ける鹽化物の濃度は鹽化物の腎臓による排泄を定むる主なる因子ではない。
- 9) Pituitrin は腎臓に對して直接の影響を持つてゐる、而して此の影響は血管に對する作用と解釋出來ぬ。
- 10) Pituitrin は鹽化物の百分數及び絶對量の著しい増加を示し而して水分の量を減少せしむ。
- 11) 此型に屬する物質は平常に於て水と鹽化物との排泄を調節してゐる。

摘出臓器から分泌された尿の性質の變化は大部分此物質の缺乏の結果である。(生理、西丸抄)

○二三の「コロイド」性生體染色々素を以てせる硝子様物質の染色に就て。 J. R. Petroff

Zur Färbung der Hyalinsubstanz mit einigen Kolloidalen Vitalfarbstoffen. (Virchow's Archiv. Bd. 252, H. 2/3, 1924.)

血流中の「コロイド」物質殊に「リボイド」が容易に血管壁に沈着するあるは周知の事にして、著者は先に「コロイド」性色素なる「トリパン」青を以てせる試験に於て病的血管壁の殊に好染せるを見たり、而して彼の硝子様若しくは「アミロイド」變性に於ける血管壁が又好んで「リボイド」の沈着を來すの事實より、「リボイド」に倣ふべき之等「コロイド」性色素が病的血管に對して如何なる態度を取るかなを見んが爲、著者は死後別出せる人脾臓に就き、「トリパン」青、「コンゴ」赤、「リチチンカルミン」ヲ灌流せしめ次の結論を得たり。

1. 脾臓の小動脈壁の硝子様物質は「トリパン」青に依て瀰漫性に着色せらるるも「アミロイド」は然らず。
2. 之に反し「コンゴ」赤及び「リチチンカルミン」は硝子様物質を着色せず。
3. 固定せる材料に於て、「トリパン」青は硝子様物を着色せず。
4. 如上の結果は硝子様物質と「アミロイド」の研究に應用し得べし。(病理、田村抄)

○尿崩症問題に關する病理解剖的竝に實驗的研究。 C. Kary, Pathol. anat. u. experimentelle

Untersuchung zur Frage des Diabetes insipidus. (Virchow's A. Bd. 252. H. 2/3, 1924.)

從來尿崩症に際し、一方腦下垂體の病變を報ずるあると同時に他方全く之が病變を見ずして、却て「ヒポタマス」乃至灰白結節に於ける一定神經核系の變化が報ぜらる。著者は先づ腦下垂體莖部に神經纖維の實在を證したる後、犬に就きて腦下垂體後葉を破壊して、所謂逆行性變性を視神經交叉部の偏側に證し且灰白結節に「グロセツタ」の出現を認め、腦下垂體と之等の神經核系の間に直接機能上の關係あるべきを結論せり。

(病理、田村抄)

○卵巣と膽汁分泌との關係に就て。 (Yuzuru Tominaga, Biochemische Zeitschrift. Bd. 157, S. 126,

1925.)

卵巣と肝臓機能殊に膽汁機能とは稍々密接なる關係を有することは多くの實驗により稱へらる。膽疾患を有する女が月經期になるか、又は生殖器疾患に冒さるるに膽疾患が増悪することは屢々見る所なり。

著者はこの事實に動機を得て生理的條件の下に膽汁分泌と卵巣との關係を犬にて検査せり。

妊娠せる牝犬に膽嚢瘻孔を作り術後これを觀察するに暫時膽汁の分泌は良好なりしも突然膽汁の分泌に異動を起し、不規則となり終に分泌は停止せり。其後この妊娠状態は平滑に進み六匹の小犬を産みこれに授乳せしもその間始終膽汁分泌が非常に減少す。この間膽汁分泌を障害すると思はるる機械的、その他の條件を見出す。小犬を離乳するに膽汁分泌は以前の如く良好となり。

しかしこの場合は一般に膽汁分泌が悪きためにこれに一時間ごとに一定量の膽汁を徑口的に與へて腸管内に於ける膽汁の存在を生理的たらしめこれに 200 g の肉と 300 g の脂肪乳と 300 g の「パン」を與へて檢したるにこれ等の栄養品によりて膽汁分泌は著るしく高めらる。しかしこの三者の間には一般に懸隔なきもの如し。

更にこの犬に兩側の卵巣切除を施したるに膽汁分泌に著るしき影響を及ぼさず。

今一匹の牝犬に膽嚢瘻孔を作りこれに 300 g の肉と 300 g の脂肪乳と 300 g の「パン」を與へて檢したるに肉を與へし時膽汁分泌は最も増加す。然る後これが兩側の卵巣切除を行ひしに膽汁分泌に著るしき影響を及ぼさず。

要するに妊娠、出産、授乳期には胆汁分泌減少し、生理的要約に於ては卵巣の有無は胆汁分泌に著るしき影響を及ぼさず。しかしこの事實は臨牀家により屢々主張さるる「卵巣の障害は肝臓機能の障害と相對する」と云ふことの反證とはならず。（醫化、寺岡抄）

○動物組織による石灰に就て。 (Th. Brehme und P. György, Bioch. Zeitschrift. 157, 243, 1925.)

蛋白質及び動物組織による生理的及び病理的石灰化並に骨化はつれに次の三段階を反覆す。

- 1) 有機的基質と「カルチウムイオン」の結合。
- 2) 周圍淋巴液より磷酸鹽及び炭水化物結合を來し延いて此等石灰鹽類と蛋白質との結合を來すこと。
- 3) 磷酸石灰及び炭酸石灰の分解及び石灰と結合せる基質の分離。

而して此の機構は由來物理學的方面より主に一の溶解作用に關する問題として觀察せられたるが、此等の變化は從來知られたる水素「イオン」濃度、陰「イオン」の影響及び物質代謝産物による抑制等のほか石灰結合を來すべき蛋白質の本質によりて影響せらる。

血球中には血清に於けるより遙かに少量の「カルチウム」存在するの事實については細胞膜の不透過性は與る處多からず、むしろ血色素及び血清蛋白（アルブミン、グロブリン）の理化學的状態の差異によると見るべく、「アルカリ」性領域に於ては血色素の isoelektrischer Punkt は血清蛋白のより大にして従て兩者内に於ける石灰分布の不同を來たすべし。Rona, Petow 氏等の同一 isoelektrischer Punkt を有する種々なる蛋白質を dialysieren し、つれに同一の石灰分布を見たる事實を造骨機構に應用して石灰化組織が酸性領域に於ては血清蛋白より強き isoelektrischer Punkt を有せざるべからずとせり。爲に特に低き isoelektrischer Punkt を有する蛋白質たる「ヌクレイン」酸を以て實驗をなし更に酸性領域に於ては次の物質の順によりて石灰結合度の高まるを見たり。

「ヌクレイン」酸—「アルブミン」(PH=4.8)—「グロブリン」(PH=5.4)—「フェブリン」(PH=7.0)—「ヘモグロビン」

細胞内に於ける石灰分布は同一ならずしてつれにその核質に少量の石灰結合を有しそれが細胞機能の亢進によりて細胞間組織に賦與せらるるは主として「ヌクレイン」酸よりなる核質の影響及び此より生ずる代謝産物による石灰親和の抑制と見るべし。

Rona 氏は Kompensationsdialyse によりて、恐らく血清蛋白と結合せる非透過性石灰は總石灰量の 35—40% と算せるが Greenwald 氏鹽溶液を以て行ひたる著者等の滲透實驗によれば血清中に於る石灰結合はその總量に相對的なることを知りたり。

犬の parathyreoprive Tetanie に於ける甚しき血中石灰減少の招來及び腎炎の際にあらはるる血清總石灰量の低下と血清蛋白の減少との關係は興味ある問題にして、乳兒の idiopatische Tetanie に於て血中石灰減少を出現するにかかはらず尙ほ石灰結合を證明し得たり。

而して赤血球中に 1—2 厘「パーセント」の石灰を有する際血清石灰は 9—10 厘「パーセント」を出現することあるは單に Kompensationsdialyse のみを以て説明と難く此は蛋白質と石灰親和力のほかに尙ほ Donnan 氏平衡も亦與る處あるべし。（醫化、唐澤抄）

○「ペプトン」の二三有效成分。 A. J. Clark, Some active principles of peptone. (Journ. of pharmacol. a. exp. therapeut. Bd. 23, Nr. 1, S. 45—54, 1924.)

大多數の實驗は摘出臓器（白鼠及び海狗の子宮、白鼠腸管、家兎耳殻）に於て施行せられた。靜脉内注射の際

の毒性は二十日鼠に於て檢せられた。白鼠子宮に對する作用に於て「ペプトン」は二群に區別し得らる。即ち 1. 同子宮を抑制するもの (Armours Pepton, Fairchilds Pepton) 2. 同子宮を催進せしむるもの (Armours Pepton [他の實驗にて], Wittepepton, Chapoteauts Pepton)。同一の「ペプトン」の二つの試験が異なる群に屬することとなり、從つて其物の作用は一定せぬと云ふ證明となる。

總ての「ペプトン」の滑平筋に對し催進的に作用する主成分は、其作用に於て大體腦下垂體髓質に似てなる。然し「ヒスタミン」と異なる。或る「ペプトン」(例は Wittepepton) は、強き交感神經模倣性作用を發現す。夫に該當せる物質は、純「アルコール」に可溶性にして、「エーテル」には不溶で滲透性である。

著者は、或る「ペプトン」の内に「ヒスタミン」が含有せられてあると云ふことに関しては何等證明し得なかつた。彼は、摘出臓器の血管に對する「ペプトン」と「ヒスタミン」の作用に關して、文獻中に誤謬がありと謂ひ、且其反對の成績を屢々水素「イオン」濃度に注意を拂はなかつたことに歸してゐる。血管擴張作用は灌流液が酸性であつたことに基いたかも知れん。0.05% NaHCO_3 を有する Ringer 中の 1:20,000 の磷酸「ヒスタミン」溶液は、PH を 8.5 より 6.8 に下げる。Ringer 中の 0.1% 「ウツタペプトン」溶液は、同様に PH を減少せしめる。PH が不變に保たれた際には、著者は、「ヒスタミン」及び「ウツタペプトン」は蛙血管環流に於て共に血管收縮を起すを見た。

二十日鼠に對する「ペプトン」の致死作用及び哺乳動物に於ける毒的作用は、主として「アルコール」に不溶解性の成分に歸すべきである。然るに摘出臓器に於ける作用は、主として「アルコール」に溶解性の部分に歸すべきである。最大毒性物質は酸或は「アルカリ」含有の「アルコール」を以て「ペプトン」を抽出するときに得らる。夫等は Vaughan 及び Wheeler の「アルコール」可溶性蛋白質毒と同一らしい。(藥物、富永抄)

○糖尿病の早期診斷に就て。 A. Maria Rosenstein, Zur Frühdiagnose des Diabetes-mellitus (Wiener. Kl. W. Nr. 15, 1925.)

糖尿症の初期一過性の近視又は兩側角膜潰瘍の來る事を 19 例(男 13 女 6)に經驗して、之等は糖尿症の早期診斷上大いに價值ある事を述べてゐる。即ち前者は患者が數日來又は突然眼の瞤む事や往々頭痛等訴へ、眼には近視の外屢々亂視を見た、眼底には殆ど異常なかりしが尿を見るに糖があるので糖尿症の治療をし全く消退した。

この近視成因については内分泌障害が水晶體に影響を及ぼし隨つて屈折率の變化を來すものと信ずる。

後者は患者が眼に異物感を訴へて來たので診するに角膜に潰瘍があつて(時々異にするも多く兩側)細菌検査では葡萄球菌と「キセローゼ」菌を見た。

其他には患者は症狀なく尿中には糖が陽性であつた、故に近視や潰瘍を有する患者を見れば必ず一應糖尿の有無を検査することは是非愈つてはならない。

且患者は主に 36 歳より 52 歳の者に多かりし事と一般に營養良好の者なりし事をも附言し、併せてこの兩者と症の輕重との關係につきては今後の經驗に俟つと云つて居る。(柿内、網島抄)

○血清及び水晶體抗素による白内障の豫防竝に治療。 A. E. Davis, Serum and Lens-Antigen Extract Treatment for the Prevention and Cure of Cataract. (Arch. of Ophthalm. March, 1925.)

氏は 1923 年 Washington に於ける萬國眼科醫大會に於て初めて報告せし 13 人 22 眼と、其後に得たる 59 人 109 眼、合計 72 人 131 眼に就て本療法を行ひし其結果を發表せり。

實驗 初めの實驗は白內障を有する患者に抗水晶體血清 (antilens serum) の靜脈内注射をなせり。而して抗水晶體血清は三様の方法によりて準備せり。

1. 健康な豚鼠の水晶體で兎を免疫することにより, (anti-guinea-pig-lens rabbit serum).
2. 人の白內障水晶體で兎を免疫することにより, (anti-human-cataract-lens rabbit serum).
3. 健康な牛屍體の水晶體で羊を免疫することにより, (anti-beef-lens-sheep serum).

白內障水晶體と健康水晶體の化學的構造は抗白內障水晶體血清の作用に徴して實驗上差異を認めず。故に動物血清を得んには健康な豚鼠や牛屍體の水晶體を以て免疫せり。其後血清を以て被動的免疫を與へんよりも能動的免疫によりて有效ならしむる方合理的なりと思はるに至れり。

理論 白內障の原因を顧慮すること及び水晶體の榮養を考ふことは本療法の原理を理解するに必要なり。J. Burden-Cooper は 1922 年「白內障の原因」なる題にて次の如く述べたり。「老人性囊下白內障は疑もなく水晶體類蛋白質の化學的分解なり、而して一般の意見は局所的機械的原因よりも生體全體に於ける變化に意義ありとさる」と。更に Roemer の説を見るに次の如し「老人性囊下白內障は例之糖尿病性白內障と同様水晶體の新陳代謝性疾患なり」と。氏は白內障の自然の成熟は水晶體の細胞及び纖維に對する直接毒性作用によると考へたり、恰も Kirkpatrick の説と符合せり。

予は大體に於て Roemer の説に左祖するものにして局所的及び器械的原因を主張せる一派には賛意を表せず。白內障の原因たるべき毒素或は細胞毒素の確なる性狀の知られざること及び Burden-Cooper の云へる如く水晶體の榮養に關する智識の缺乏は益々この間の消息を混亂せしめ、水晶體榮養の問題は之が繁雜なるためと非常なる困難のためとによりて古來未解決の儘にあり。予はこの點に關し白血球は恐らく trephon を供給することによりて水晶體の榮養に役立てる點に特に注意を拂はんを欲するものなり。水晶體は上皮細胞より發生し水晶體纖維となり、その生長は個體の發生よりその死に至る迄不斷に行はるるものなり、若し是が生長を止むるや即ち活力なき死滅せる凝固となりて茲に白內障を生ずるものなり。故に吾人が白內障を防止せんを欲するならば第一に水晶體の榮養を高め、第二に水晶體細胞の生長を刺戟すること必要とす、而して白血球は榮養に必要にして又内分泌腺は Hormon を供給して生長の刺戟を與ふるものなり。更に Carrel を引用すれば「胎生的細胞の生長を助長する物質を含める白血球は生長に向つて必要な本原を結締組織及び上皮組織に供給するの力を有す、食物は淋巴球によりて緊要なるものの製作に用ひらる、かく淋巴球や巨大食菌細胞は血清要素のあるものを trephon に變化する可能性を有する一細胞性腺なりと考へ得らる、吾人は實驗上淋巴球は生涯を通じて胎生的増大助長物質或は trephon として残り且必要に應じて細胞動作の回收を起すものなることを知る、故に淋巴球は二重の官能を有す、即ち他物質及び壞疽物質の破壊及び動作細胞の増殖なり」と。扱て白內障の原因に就て吾人が Roemer の説即ち不完全なる新陳代謝に由來する血液中の毒素に原因するてふ説を採用するならば第一に抗水晶體滲出液を體內に注射することの如何に白內障の進行を防ぐに效果あるか自ら了解し得る所なり、第二に之等特別なる抗體は白內障に對して選擇的に作用して之が液化吸収を促す。白血球及び淋巴球は水晶體細胞及び纖維に特別なる食物を運ぶに大なる任務を有し、眼自體の局所刺戟による療法の原理も故に自ら了解し能ふ。實に多くの眼科醫は局所刺戟のみによりて極めて初期の初發白內障は之を停止せしめ得て視力を恢復せしめ能ふと主張せり、Badel, Dor, Taylor, Colonel, Henry, Smith 等の言皆然り。局所充血に關して予は最初の論文に於て次の如く評論せり、「何故溶細胞性血清が成熟したる動物或は人の水晶體に有力に作用せざるかの説明は前房液中の alexin 或は complement の不足によるものなるべし」この奇妙なる事實は Zinsser によりて注意を惹けり、前房水中には正常の状態にて

は alexin は存在せず、然れども第二房水中には之を見る、Metchnikoff の説に従へば白血球と共に入り来りしものならん。何れにするも體液中にて白血球なき時は alexin もなく、白血球の來ると共に alexin も侵入するものならんさは考へ得らるべきことなり。

使用法. (1) 患者の裸眼及び矯正視力を檢し、次で Homatropin を以て散瞳して精査し其後 Eserin を點じて縮瞳せしむ。(2) 患者の水晶體蛋白に對する反應試驗を行ふ、即患者の前房を無菌的に處置したる後 Lensantigen 14, 5 滴を皮下注射す、水晶體蛋白質に對して過敏なる時は 2—20 時間内に局所には發赤及び腫脹を起す、反應著明なる時は次に行ふ治療的注射の際に極めて少量づつ行ひて遂に普通の量に堪へ得るに至らしむ。(3) 過敏試験の翌日 Lensantigen の治療的注射を始む、第一回量は法則として $1/2$ cc なるも強壯なる人には 1.0 cc を用ひて可なり、婦人、弱き人には毎回 $1/2$ cc を増量し、元氣なる人には毎回 1.0 cc を増量す。(4) 注射は隔日又は 1 週 3 同行ひ漸次増量して女 8.0 cc 男 10.0 cc の極量に達せしむ。療法の一療程を 50 用量とし 4 箇月以上を費す、時に 75 用量に達せしむるも可なり、特別なる場合には注射を毎日行ふも可なり。(5) 注射療法實施中少量の沃度加里を投ずべし、又は鹽酸「リモナーテ」を與ふ、尙ほ患者には努めて食鹽少き食物を攝らしめ衰弱せるものには強壯劑を投ず。(6) 注射液は平素は氷室に貯へ使用前少し温む。(7) 注射部位に於ける局所反應は時に著しく殊に療法を終りに甚し。(8) 療法が 2 週間も中斷したる時は anaphylaxie を防ぐため過敏試験を繰り返すべし。

131 の白内障眼に就て得たる結果は後に表示せるが予は思ふにこの結果は成熟老人性白内障の手術的療法と比較したる時でさへ尙ほ且可成りなる良結果なり。普通の術者による白内障の手術的療法の良結果は 90% 以下なり。更に尙ほ不結果なる場合には手術的療法にては視力の挽回不可能にしかかることは非手術的療法にては嘗て見ざる所なり。更に非手術的療法は患者が尙ほ普通の視力を有する時機に於て適用し得るに拘らず手術的療法によりて良結果を得んことを欲せば充分成熟する迄數月乃至數年間手術を延期せざるべからず、而もかかる間に手術はある範圍に限定さるるに至ることすらあり。何れにするも非常なる老練家ならざる限りある程度迄は投機的療法と云はざるべからず。

效果の持續. 予の一患者は 1921 年 2 月老人性成熟白内障にて右眼を手術し、當時左眼には皮質に 2, 3 の針狀體あり、視力 $\frac{20}{15}$ 注射療法によりて白内障は進行を停止し視力は $\frac{20}{15}$ あり今日に至る迄 3 年半繼續せり。一般に本療法により白内障は進行を停止し、視力は増加し而もこの状態は繼續せり。尙ほ予は細隙燈によりて療法の実施中漸次水晶體の潤濁の晴れ行くを實見せり。

結論. Lensantigen のみの使用によりて。(1) たゞ針狀體や騎子は吸収されずと雖も初發白内障の凡ては進行を停止せしめ能ふ。(2) 視力の 50% 以上を失へる未熟白内障は 90% 以上に於て進行を停止せしめ得、而も 65% 以上に於て視力を増加せしめ得。(3) 成熟白内障に於ては白内障の大部分は吸収さる、しかし之には長期の療法を必要とす。而も核は終に吸収されず。(4) 療法を早期に實施すること即ち視力 $1/2$ 以上失はれざる程度の患者に著效あり。(5) 宜しく眼科醫は見界を廣くして白内障の非手術的療法の可能性を具體化して何等試むる所なくして患者を盲目の状態に放置することなき様努むるは必要なることなり。予は Coloner Henry Smith と共に生理學者が尙ほ一層の注意を水晶體及び硝子體の榮養に向けんことを希望するものなり。更に予は生理化學の研究及び一般榮養の問題は吾々眼科醫の手にある困難なる問題に向つて進むべきものならんと思惟す。

結果表.	患者數.....	72	} 93.12%
	白内障眼.....	131	
	進行停止して視力良くなりしもの...(眼數).....	86=65.64%	
	進行停止せし視力良くなりざりしもの...(眼數).....	36=27.48%	
	増悪せしもの...(眼數).....	9= 6.87%	

(眼科、大森抄)

○精神病者の赤血球沈降速度に對する温度の影響。 Löwenberg, Konstantin: Über den Einfluss der Temperatur auf die Senkungsgeschwindigkeit der roten Blutkörperchen bei Geisteskranken. (Zeitschr. f. g. N. u. P. Bd. 93, H. 3/5, 1924.)

Fahraeus が赤血球沈降速度を各種疾患の診断及び其豫後判定に用ひてから多數の人が精神病者に對してもこの試験を行つてゐるが未だこの反應に對する温度の影響を精檢したものがないので著者は此點に注意し常人及び精神病者の血液に就て氷室に入れた場合、室温に放置した場合、孵卵器中に入れた場合の三通りの温度の差がその赤血球沈降速度に及ぼす影響を檢してゐる、その結果に依るゝ常人ではその變化は極めて渺なく且規則正しくして常に氷室に入れたものが遅くなり孵卵器に入れたものが促進せられる事實を示した、然るに精神病者に就て見るゝ明に病的と思はれる状態を示した、著者の行つたのは麻痺性癡呆、早發性癡呆、癲癇の三大群であつたが麻痺性癡呆に於ては常人に比して一般に温度の影響によつて結果を左右せられる事が著しく強いが病の初期にあつては其影響が極めて不定である、早發性癡呆に於ては麻痺性癡呆に比して少しく安定であるが尙ほ温度の影響は相當に認められ孵卵器に入れたものに於て最大の沈降度を示すのが普通である、時にその反對に氷室に入れたものに於て最大の沈降度を示す如き paradox を示す事もある、身體の榮養狀態或は精神狀態は特別の影響はない、癲癇の場合にあつては以上の兩者に比べるゝ最も温度の影響を蒙る事は少ないが尙ほ常人に比すればより強く認められる、産褥による精神病にあつては特殊の状態を示すものでその身體狀態の不良なることに一致して著しく高い沈降度を示してゐた、著者は以上述べた如くに各病症に従つて沈降度に及ぼす温度の影響の特徴を述べてゐるがそれを精讀するゝ必ずしも左程明らかな特徴を認められない様で抄録者の見る所によれば病の診断には左程役に立たないものの様に見える、又その豫後判定に關しては著者のあげた事實を基として推するに他科に於る實驗は知らず少なくとも精神病者の豫後に對しては大した指針となるものゝは考へられない、従つてこの現象は生物學的のものとして見る時は興味があるが實際臨牀的には大して用ゐる價値はない様である。(精神、大熊抄)

○脊髓腫瘍の診断に關する知見補遺。 Grünbaum, E. Beitrag zur Diagnose der Rückenmarktumoren. (Archiv f. Psych. Bd. 73, Heft 2/4, 1925.)

脊髓液の所見から脊髓腫瘍を診断するのにその壓力が急激に下降する事を一つの標識とする事は従前より知られた事實であるが著者は此事實に尙ほ脊髓液の Xantochromasie 及びその凝固性の高まつてゐる事を加へ以上の Symptomentrias を以て脊髓腫瘍の診断に必要な標識となすべき事を提言し二三の病例を擧げて之を立證してゐる、しかしながら著者の追加してゐる Xantochromasie 及び凝固性の増強なる二つの事實は單に炎症機轉の存在を示す事實であつて之がある事は腫瘍の反證とはならないけれども必ずしも之なければ腫瘍の診断が確立せられないと云ふ事は云へまいと思ふ、壓力の急激なる低下は脊髓管中に於て何等かの通過障礙のある事を示す事實で脊髓液の所見を以て脊髓腫瘍の診断を考へさせる他の臨牀的所見の補助とするならばこの壓力の低下と云ふ事實で既に十分で何も著者が云ふ様な Symptomentrias を擔ぎ出す必要はない様に思ふ。(精神、大熊抄)

○腦脊髓液の「パラフィン」反應。 V. Kafka, Die Paraffinreaktion der Liquor cerebrospinalis. (Zeitschr. f. d. ges. Neurol. u. Psych. Bd. 94, Heft 5, 1925.)

腦脊髓液の膠質化學的検査は 1912 年 Lange 氏が Goldsol 反應を創始して以來諸家に依つて種々の研究が企てられ、Normomastix 反應 (Kafka) の如き優秀なる方法を發見せられたが、孰れも其操作が面倒であつて且熟練に

時を要するし、他方又操作簡單なるものは多く使用する價值に乏しいといふ狀況で常に多少の憾なきを得なかつたのである、ところが Kafka 氏が最近報告した「パラフィン」反應は多少此遺憾であつた點を充たし得る様に思はれるので、此所に抄録して見やうと思ふ。

原液の製法：50°の融解點を有する「パラフィン」0.3 gr に純酒精 100 cc を加へ、完全に「パラフィン」が溶解する迄温める、此際の溫度は只「パラフィン」が溶ければよいのであつて必ずしも融解點に達する必要はない、但し冷却すれば(室温に放置しても)「パラフィン」は再び析出する。

次に此際使用する「パラフィン」は何種でも差支へない、著者は亞米利加製白色鱗狀「パラフィン」(51°—52°)、同帶赤色板狀「パラフィン」(51°—52°)、同板狀「パラフィン」(50°—52°)、或は普通研究室で使用する 53°の「パラフィン」をも用ゐて居る、要するに約 50°で融解するものならよいらしい。

試薬の製法：原液 acc (使用する試薬の量に應じて適宜に定む) と同量の蒸留水を共に熱し、蒸留水が正確に「パラフィン」の融解點に達した時急速に之を原液中に注ぐ、かくして得たる trübopaleszent の試薬は室温に放置するも最早や沈澱しない。

試験方法：稀薄は普通 1/2 から始める、仕方は Goldsol 反應や Mastix 反應の際と同様であつて、先づ清潔なる小試験管 11 本を採り其各々に 0.3% 食鹽水 1.0 cc 宛を入れ、然る後第一の試験管に腦脊髄液 1.0 cc を加へよく振蕩したる後其中から 1.0 cc を採つて第二に試験管に移す、かくの如く順次稀薄の度を高めてゆき最後の 1 本は對照として殘す、次に各試験管へ更に試薬 1.0 cc 宛を加へて振蕩後室温に放置すれば反應が起るのである。

併し單に診斷の目的には 1/4 稀薄から始めてよい、即ち此際には第一の試験管に 0.3% 食鹽水 0.75 cc を入れ之に腦脊髄液 0.25 cc を加へ其中から 0.5 cc を採り次の試験管に移し、以下順次之に倣ふ、第二以下の試験管には豫め 0.3% 食鹽水 0.5 cc 宛を入れ置く事勿論である。

試験の結果：若し反應が強く起るに管底に沈澱を生じ上澄は透明となる、著者は反應曲線を描くに當り反應度を 0, +, ++, +++ の四度に分ち、時には更に其を倍にして 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6. と記して居る。

著者は此「パラフィン」反應を麻痺性癡呆症、腦敵毒、腦膜炎患者及び健康者 700 例に就て檢し、其病的曲線は Goldsol 反應又は Mastix 反應に於けるものと相類似し正常なるものにありては毫も變化を認めなかつた、且其定型的曲線は Normomastix 反應の曲線に近い、又此反應は「マヨリヤ」療法を行ひつつある麻痺性癡呆患者の腦脊髄液を檢する際には特に鋭敏であること述べ、更に此「パラフィン」反應の特徴として 1) 腦脊髄液の使用量が僅少 (0.25 cc) なること。2) 操作甚だ簡單なること。3) 食鹽水豫備試験を必要とせざること。4) 價の廉いこと。5) 反應の變化が比較的見易いことを擧げて居る。

併し此「パラフィン」反應は著者即ち Kafka 氏も認めて居る様に Goldsol 反應又は Mastix 反應よりも優れたるものではなく、其價値は恐らく「ベルリン・ブラウ」反應と同位置に立つものと考へる。(精神、武野抄)

○梅毒血清診斷に於ける Wassermann, Bruck 竝に Meinicke 氏反應の併用に就て。

Behrmann, Über die Zweckmässigkeit von Paralleluntersuchungen nach der Wassermannschen, Bruckschen und Meinickeschen Reaktion (M. T. R.) bei der Serodiagnose der Syphilis. (Dermat. Zeitschr. Bd. 43, H. 1/2, 1925.)

Meinicke 氏濁濁反應 (M. T. R.) は其操作簡單なる事及び其鋭敏性竝に反應範圍廣き事に依りて血清診斷學に大なる改良を致せり。

著者は 808 例の血清を三種の方法を以て試験せり、但し M. T. R. には必ず「フォルマリン」對照を使用せり。

而して著者の試験に於ては弱き「エキス」が陽性に出でたるは稀にして強き「エキス」は屢々非特異の陽性に出たり。普通一時間後には濁濁を生じ二十四時間後には沈降す。

M. T. R. に於て沈降度を讀む事の利害に就ては其見解區々たり、著者は次の理由に依りて濁濁の方を尊重せり。即ち第一 M. T. R. は元來一つの濁濁反應にして且迅速なる方法なる事、第二に敵毒血清にして濁濁を讀む際には陰性なりしものが沈降時には弱陽性となる事あれども他方多くの非特異性沈降を呈するが故に濁濁度を見る方適當なるなり。

試験血清 808 例中三方法共に陰性なるもの 536 例、陽性なりしもの 173 例。故に完全に一致せるは 709 例即ち 88.62% なりき。

結果不一致なるものの中 W 氏反應の勝れる場合は B 氏反應に比して 23 例、M 氏反應に比して 8 例あり。B 氏反應の勝れるもの W 氏反應に比して 33 例、M 氏法に比して 6 例。次に M 氏法の勝れるもの W 氏反應に比して 54 例、B 氏反應に比して 42 例なる。

次に敵毒各期に就きて見れば各相違點あれども第一、第二期敵毒に於ては M 氏法 (M. T. R.) が最も勝れ W 氏反應は是れに次ぐ。第三期敵毒にては一般に M 氏法と B 氏法は略々同様にして共に W 氏反應に勝る。潜伏期敵毒殊に後の潜伏期にても同様に M 氏法及び B 氏法と W 氏法よりも勝り、此の際は時として B 氏法が M 氏法よりも鋭敏なり。

非特異の結果を招來し易き猩紅熱、結核、急性傳染病、胎盤血液等に就て多くの對照試験を行ひしに W 氏法にては決して非特異の結果を生ぜず、B 氏法に M 氏反應にては敵毒の確證なき慢性關節炎、慢性腸炎患の二例に於て陽性を呈せり。尙ほ W 氏法と B 氏法にては完全に陰性なるにも係らず M 氏法にて確に非特異的陽性に反應せるもの 7 例あり。

要するに M 氏法は實地上有效なるものにして且優れたる方法なれども一面非特異的反應の傾向を有する不利あり、然れども今後 M 氏法並に B 氏法は W 氏法と共に必要缺くべからざるものにして上記三法を併用するを理想とせり。(皮泌、内田抄)

○Dold 氏反應の後期沈降に就て。 Friedrich Weyrauch, Zur Beurteilung der Spätflockungen, insbesondere bei der Dold-Reaktion. (Dermat. Zeitschr. Bd. 43, H. 1/2, 1925.)

敵毒反應待に Dold 氏反應 (D. R.) に於て數日後に顯はるる後期沈降なるものあり。他の沈降反應に於ても之を説く者あり。

著者は約 200 例に就て D. R. を行ひて 24 時間綿栓を施し 37°C. に置きしに 24 時間後には陰性なりしもの日を經るに従ひて沈降の數を増加せり。即ち 3 日後には 12%, 6 日後には 35% を見る。之を寒天に培養したるに細菌の集團を見、對照試験管は透明なりき。此の細菌よりなれる沈降物は Agglutinoskop に由り其の不規則の形、大さの不同等に依りて眞正の沈降物と區別せらる。細菌による沈降物は早くとも 48 時間後に現はれ 24 時間後には「エキス」内の「アルコール」に依るものか) 決して出現せず、稀に 2—6 日後尙ほ特異的沈降を見る事あり、即ち 3 日後には全體の 2% あり。此際 Agglutinoskop にて全く特異的に見え寒天培養は多くは無菌なりき。此の特異的沈降なる見解は一方醫師の診斷との比較に依り他方 W 氏反應が陽性にして初め D. R. が陰性なりし事實に由る。著者は Sachs-Georgi 氏反應及び Meinicke 氏第三沈降反應に於て既に 48 時間後に後期沈降を見、培養上細菌を證明せり。

結論として D. R. は稀に 24 時間以後に尙ほ特異と見らるべき沈降を現はす事あるも普通は細菌傳染によりて生じたるものにして日を經るに従つて増加す、故に後期沈降は殆ど價値なきものなり。此事實は他の沈降反應に於ても同様なりと云ふ。(皮泌、内田抄)

○胃疾に續發せる「ペラケラ」に就て. W. L. Bender, Pellagra secondary to lesion of the stomach interfering with nutrition. (J. A. M. A. Vol. 84, No. 17, 1925.)

胃腸障害ある爲適當なる營養の不可能なる三患者に於て偶然に「ペラケラ」の發生せるを實見せり。

第1例は胃に良性潰瘍ありて胃の形態異常ある爲餘儀なく牛乳、卵等にて腸管營養を行へるに一箇月後兩手背に紅斑後に色素沈着を生じ口粘膜にも炎症起り興奮し易くなれり、後胃腸吻合を行ひ正常食に復せるに是等の症狀は全く消失せり。

第2例は癌性幽門狹窄に續發したる「ペラケラ」にして兩手背及び顔面に色素沈着、落屑、浸潤等ありて其他胃症狀の外には障害なし、胃腸吻合の後に「ペラケラ」は一時輕快せるも衰弱の爲死亡せり。

第3例は前例と同様に發せるものにして症狀も同様なり、胃腸吻合を行へるも遂に死亡せり。

上記三例中何れも胃疾患が食物の通過を妨げし後に「ペラケラ」を發生せるなり、即ち第1例にては動物蛋白質にて腸管營養をなせる際に起り、經口的普通食により消失せり、第2例には胃停滯を外科的に處置し充分なる食事を取らせしに「ペラケラ」様狀態は一旦輕快せり、第3例には食事を改良せんと試みたる手術後二週間に於て死亡せり。上記の觀察は「ペラケラ」の原因論に關して或る暗示を與へるものの如し、「ペラケラ」の原因に關して傳染説、營養説の二説あり、併し後説が信ぜられんことつつあり、營養缺乏説は食物中蛋白質量の缺乏よりして更に「アミノ」酸の缺乏に歸着せられんこと、他方には食物が主として含水炭素より成る時に一種の菌の作用により生ぜる放光物質(Photodynamic substance)が腸管より吸收せられて「ペラケラ」を起すこと云ふ人あり、即ち傳染説、營養説の兩者を認めんことせるものなり、上記三例に於て唯一の明白なる原因は營養障害なり。(皮泌、荒田抄)

○腎臓露出に對する腰部切線に就て. Rosenstein, Ein funktioneller Lumbalschnitt zur Freilegung der Niere. (Zschr. f. Urol. Chirurg. Bd. 17, H. 54, 1925.)

腎露出に對する腰部切線の理想的要求としては2あり。1) 腎に良く達し得ること、2) 腹壁を出来るだけ傷けざることなり。古來より行はれし腰部切線法としては次の如し。

a) Simon 氏縦切線法は應用範圍僅少にして、只腎臓剝離、試験的腎露出、遊走腎固定法等に適用せらる。缺點としては、腎を切面に露はすこと或は病的に肥大且癒着せる腎を引はなすこと難し。b) Czerny 氏法は、Simon 氏法を少しく前方に進め且、第十一肋骨の部分的切除を併用せるものなり。Braun 氏は、此法を改め第十二肋骨の直下より15 cmの切線を作れり。此の法は、腰部及び腹部の筋肉を、較々大なる部分に於て切斷する缺點あり。c) Czerny-Kocher 氏法は、肋骨窩の下部に始まり前方腋窩線に達す。此法を改良して種々の方法考案された。d) Bergmann-Israel 氏法は、腸筋筋の外縁にて肋骨の下部に始まり、斜に前下方に Poupart 氏靱帯の外 $\frac{1}{3}$ の所に達す。此切線は、同時に輸尿管露出のためにも用ひらる。此他無數の方法唱へられたるも、以上の切線は何れも多少腰部、腹部の筋肉に損傷を來し、第二次障害として筋肉の麻痺と腹部の畸形及び衰弱を殘すことあり。されど e) Rosenstein (著者) 氏法は、以上の缺點を除くために幾多の實驗と解剖的研究に基いて、作られしものなり。この切線に點a, b, cを擧ぐ、aは第1腰椎棘状突起より外方8 cmにあり、bは腸骨前上棘より後方14 cmの所にあり。この方向に於て、切線は點aより18 cm斜に前下方に走る。18 cmの長さにては點bに達せずして2—3 cmの上方に止まることあり。是は軀幹の大小によるものなり。されどこの方法にては、往々にして第十二肋骨切除をなすべきことあり。最近、同氏法にて第十二肋骨切除を併用して成功せる2例あり。内1例は、短き軀幹を有せる患者にして、數年來膿腎を有し、癒着高度のものなりき。第2例は、副腎腫にして、下腔靜脈にまで侵入せるものなり。尚ほ深在性輸尿管結石に際しては、腹壁筋に前方に向ひ鈍角に曲れる補助切線を作る。著者の法に據れば、筋肉及び神経を傷けずして、其癥痕も醜形を殘さずと云ふ。(皮泌、大道抄)